

### 第Ⅲ群 座長のまとめ

旭川 医大  
海野 徳二

この群の5題はすべてMSアンチゲンのネブライザー使用による臨床効果を発表したものである。1回の使用量、使用頻度、回数等に差が見られるものの、すべての報告でその有効性が確認された。副作用についても全く見られないことが多く、あっても軽度なものであった。各演題に共通して言えることは、他の薬剤に比して鼻閉に対する効果が大きいことであった。鼻アレルギーに対する薬剤の効果を評価する場合、一般には鼻閉が最も治りにくい症状である。従って、これはMSアンチゲンの特徴点ということも出きよう。

今回の研究会では、午前中のパネルディスカッション「エアロゾル療法の現状と未来」で、この療法の再検討が行われた。ネブライザーは注射と異なって疼痛を伴うこともなく、局所に高濃度の薬液を、速やかに作用させることが可能であると考えられている。また、逆に鼻粘膜からの吸収効果を狙って、全身効果を期待するスプレー療法も考えられている。兵昇先生によると、ネブライザーの使用は、鼻科学領域では副鼻腔炎の治療として開発せられたものであった。いかにして副鼻腔内に薬液を到達させるかが重要な課題であり、陰圧、振動、粒径、等種々の工夫がなされて今日に至っているのである。

この群に対して鹿児島大学李先生から「ネブライザー療法」と「エアロゾル療法」とはどう違うのかという質問があり、佐藤素一先生から詳しい解答があったが、ネブライザーとスプレーを混同して、同様の目的に使用してしまっているのが現状であろう。若し鼻腔を目的とするものであるならば、果してネブライザーを用いねばならないであろうか。週2回投与と週1回投与では2回の方が効果が高いという。スプレー投与でもっと回数を増やしたらどうなるであろうか。

熊本大学石川哮教授より、このような治療法に対してコントロールが行われていないという指摘があった。投与効果で何故鼻閉に最も有効であるかを考える前に、コントロールを設けた研究が必要であるという発言であった。ネブライザー療法は最初の目的が副鼻腔炎治療のように、閉鎖腔を目標としたものであった。開放空間である固有鼻腔を目標とした場合は、ネブライザーのエアロゾル粒子の特性、或は沈着液によるメカニカルな効果も検討する必要がある。生食ネブライザーと薬剤含有ネブライザーとのDB研究のような勇敢な発表があってもよいのではなからうか。現在まで、種々の注射用薬剤のネブライザー療法の臨床成績が発表されて来たが、このような試みは少ないようである。

MSアンチゲンのネブライザー療法については、既に研究班が発足して、臨床研究の緒についている。基礎実験も着々と進められており、近く再び研究会も開かれる予定とのことである。

この群の今回の発表は、改めて根本的な問題を考えさせるものであった。